Steel Landscape 鉄の点景

ペーパーナイフ

形も素材もさまざまなペーパーナイフ。左列上から1、2、3、4番目、右下から2番目の青い柄のものがステンレス製。その他は真鍮などの合金製。

ナイフと名がつくものの中でも、ペーパーナイフは一種独特のものである。それを使う対象自体が限られることもあって、日本ではそれほど多用する一般的な文具とはいえないが、「切る」という機能はごく限定される一方で、卓上のおしゃれな小物として、さまざまな形状をとり装飾を凝らしたものも多い。このペーパーナイフの世界に改めて触れる。

欧米では「必需品」だったペーパーナイフ

ペーパーナイフは「ナイフ」とはいえ、紙を裁断するものではなく、袋折りされた紙の折り目に沿って開封するための道具である。生活習慣上、日本ではそれほど必須の道具とは思われないが、もともと、欧米では非常に馴染み深いものであった。

普通、本は4ページ単位（8ページや16ページが一般的）で1枚の紙に印刷され、これを折りたたんで端を綴じて製本される。現在はその後、ページを開く側の3辺（小口）を裁断したものが販売されているが、出版が盛んになりはじめた頃（17世紀〜18世紀）の近代のヨーロッパでは、通常、裁断されないままの状態で出版された。この形態の本を「仮綴（かりとじ）本」と呼ぶ。特にフランスでは、つい数十年前まで、この仕様で書籍が出版されることも多かったので、仮綴は「フランス綴」とも呼ばれる。

購入したばかりの仮綴本を読む場合は、読み進むに従ってページの端を切り離す必要がある。そのため、「読書人」であれば、ペーパーナイフは普段手元に置いてしばしば使う、必須の道具だったわけである。

さらに、手紙の開封もペーパーナイフの主な用途のひとつである。

日本の和封筒は折りたたんだ書簡より一回り大きいので、封の口を手で破り取る方法でも間に合うが、洋封筒（エンベロープ）は、書簡がぴったりと収まるサイズなので、中身の書簡を損ねないよう、ペーパーナイフを使って開封するのが一般的である。

またこの場合、封の折り返し部分を切り離す場合もあるが、西欧ではもともと封蝋を使って封を止めていたので、のり付け部分を「はがす」形でペーパーナイフを使うこともある。

手紙の開封を主用途とする、現代的なペーパーナイフ

（上）直径約10cmの半円状が、しっくりと手になじむ。刃先が細いので封筒の開封がしやすい。材質はステンレス。デンマーク製。（写真提供：有限会社スコープ）
（下）机の上に置いたとき、刃先がわずかに浮く形状のため、紙の間に差し込みやすい。長さは21cm。表面はサテンクロムメッキ仕上げ。（写真提供：イントレックス株式会社）

ペーパーナイフの機能とかたち

対象を鋭く裁ち切る用途のナイフと違い、ペーパーナイフは紙の折り目に沿って切り裂く道具なので、それなりの硬度を持ち、紙の上で滑らかな素材であればよく、刃立ての必要はない。

したがって、ペーパーナイフは鉄のほか、真鍮、しろめ（錫を主成分とする青灰色の工芸用低融点合金）などの合金、装飾性の高いものでは銀などの貴金属、さらには、木や動物の骨・角などの素材から作られることもある。

刃をつける必要がなく、それなりに鋭い形をしていれば用を成すので、製作も容易で、実用性よりも装飾性を重視したものも多く、北欧ならばトナカイの骨、木材の産地であれば木製など、それぞれの地元の産品を生かした土産物としても多く作られている。

仮綴本を開くことが主用途であった時代のペーパーナイフは、読書そのものが上流階級のものであったために、デザインも荘重なものが多く作られた。

古代から近代に至る剣などの武具のミニチュアのペーパーナイフなどもある。コレクション向けには、本格的なナイフの刃を落として、ペーパーナイフとして使用可能にする場合もある。

ただし、これらの「装飾品」としての側面が強調されたペーパーナイフでは、刀身そのものに厚みがあったり、刃先の丸みが強すぎたりして、切り離し部分が「切る」というよりは「破る」に近い状態になるなど、実用性には乏しいものもよく見受けられる。

実用品としてのペーパーナイフでは、やはり鉄、鋼製が主であり、現在ではステンレス製のものがよく見られる。通常のナイフ同様に、440C、ATS-34といった、炭素含有量の高いハイカーボンステンレスが使われている例もある。

仮綴本が少なくなった現在では、欧米でも封書の開封が主用途となり、ペーパーナイフも、それに合わせて、さらに細身の小型のデザインが主流となっている。

商品としても、「ペーパーナイフ」ではなく、あえて「レターオープナー」の名を冠して売られていることも多い。

仮綴本を開くのと違い、封書を開ける際には、封筒を机上に置いたまま押さえ、ペーパーナイフを差し込む使い方をする場合も多いので、柄と刀身が一直線ではなく、刀身を寝かせても柄を持ちやすいよう、ある程度の角度を付けているものもある。

これをはじめ、実用性の高い文具としては、「使いやすさ」「持ちやすさ」「日常的な机上品としてのデザイン性」を追及した、新しい形のペーパーナイフもいろいろと登場している。

ペーパーナイフのこれから

大手の文具店でも、ペーパーナイフが独立したコーナーで扱われていることは少なく、たとえば「ギフト用品、一般文具、（万年筆などの）高級筆記具の3つの売り場でそれぞれに傾向の違う商品が扱われている」（銀座伊東屋）といったように、いささかマイナーな存在であることは否めない。

また、レターオープナーとしてのみの役割をもつものとしては、現在では、スリットの中に2枚の回転刃を仕込み、モーターでこれを回す方式の機器も一般に使われている。封書の口をスリットに通すとスイッチが入り、封の口を回転刃で切り離し、開封する。これには、卓上で使う乾電池式の小型のものも、また、より大量の郵便物を一気に開封する、より大型のものもある。

郵便物を多く受け取る事務所などでは、これらの自動式の「レターオープナー」を使うほうが、現在はより一般的であるかもしれない。

こうしてみると、一般的な文具・事務用品としてのペーパーナイフの必要性はますます薄れているように思える。しかし一方では、手になじみ、卓上で存在感のある道具を愛で使うニーズは常にある。そうしたニーズがある限り、ペーパーナイフは存在し続けるであろうし、より機能やデザインを追及したものも生まれ続けるであろう。

〔取材・文＝川畑英毅〕
取材協力＝伊東屋銀座本店